



紙芝居「しんせつってなあ〜に」

(低学年向け)

製作・脚本:「小さな親切」運動本部 絵:小松 咲子 (13枚・表紙含む)

①
とも子ちゃんのお母さんは、エレベーターに乗っているとき、走ってくる人を見ると、「開く」ボタンを押して笑顔で待っています。とも子ちゃんは、お母さんがどうして嬉しそうなのか、不思議に思っていました。



②
ある日お母さんとエレベーターに乗ったとも子ちゃん、荷物を持って走ってくる人を見て、お母さんのように「開く」ボタンを押して待っていると、乗ってきたおじいさんからお礼を言われました。



③
「開く」ボタンを押してあげると、喜んでくれることを知ったとも子ちゃん。笑いかけて乗ってくるお姉さんもいました。とも子ちゃんも、にこっと笑顔になりました。



④
エレベーターが動き出したとき、「3階お願いします」との声が聞こえ、とも子ちゃんは、3階のボタンを押しました。その男の人に「ありがとう」と言われたとも子ちゃん、すがすがしい気持ちになりました。



⑤
買い物が終わって、またエレベーターに乗りました。今度はお母さんの後ろで、乗ってくる人や降りる人をよく見ることにしました。



⑥
エレベーターが1階に着きました。「開く」ボタンを押しているお母さんに、「ありがとう」と言っていく人、軽くおじぎをしていく人、何も言わないで降りていく人、いろいろな人がいます。



⑦
何も言わないで降りていく人に、とも子ちゃんはちょっとムッとしました。お母さんがせっかくボタンを押しているのに、お礼も言わないなんてひどい、と思ったからです。



⑧
とも子ちゃんはお母さんに「お礼を言わない人はいやな感じ。お母さんもそう思うでしょ」と聞きますが、お母さんは、「ボタンを押すのはいいけど、ムッとするのは、本当の親切ではない」と言いました。



⑨
とも子ちゃんは、みんなのためにエレベーターを開けておいてあげたのに、どうして私は親切ではないのかなあ?と考えます。



⑩
そこでとも子ちゃんは、普段のお母さんの行動を思い返します。そして、お母さんが誰にでもやさしくて、いつも自然に親切にしていることに気づきます。



⑪
そこで、自分は「ありがとう」と言われなくても、ムッとしてしまったけれど、本当の親切は、自然にする優しさなんだ、とひらめきます。



⑫
とも子ちゃんはお母さんに、自分が気づいた本当の親切、親切をすると心が温かくなることを語ります。そして、これからは本当の親切さんになるね、と約束しました。

